

山下 弥生  
(1993年研修参加)

た教育レベルの高い町で、奨学金の sponsor も多く、英才教育が発達していました。多くの教育場・研究の場がある町でした。保育園や養護施設も緑の環境の中にカラフルな設備のルームがあり、一才半から七才までの幼児がそれぞれの個性に応じて完全に保育されていました。働く女教師は身だしなみ良く娯楽と情操教育に責任と自信を持って当たっていましたし、養護施設でも治療を施しつつ子供に夢を持たせた職業指導がされ、昔の村の生活用具等展示の部屋もあって芸術を愛する心を養っていました。

ソマノヴィボル市は原子力関係の仕事の町、若い労働者によって創られた平均年齢32才の市制20年の青年都市でした。放射能の危険を考え一般労働より国の補償も確保されて居て、そこで働く人々の給料は普通労働者の約2倍、9万5千ルーブルで45才より年金が支給されるなど経済不安のロシアにあつて優遇されていました(注・給料労働者平均4万2千ルーブル、医師2万8千ルーブル、看護婦3万ルーブル)生活困難な為出生率が50%も低下している国でしかも危険と隣合わせの地域にも拘らず8人の子宝家庭が多く、町の3分の1世帯が3人以上の子供を持ち生活は簡素ではありますが子供にはピアノやバレエを学ばせ母親が育児や食事に愛情を込めて暮らしているゆとりを感じさせられました。この背景には、3人目の子供出産よりホームヘルパーが派遣され、一人2千ルーブルの子供手当が支給され、母親の育児休業終了後の復職の保障がある故だと思いました。子供のための「お伽の町」が創られ子供人形劇場もあり18才までの子供が芸に精進している姿にも個性を伸ばす教育に力が入れられているのがわかりました。

しかし日に日に経済状態悪化の波が押し寄せている実情は否めず、従来は国に大きく依存していた生活や補償は州に移行し、現在は個人の独立採算の生活へと変動する大きな混乱を感じました。人気の無い住宅用ビル・配給に並ぶ人列、街角の表情に暮らしを守る事の困難さを垣間見ました。私達は経済大国と言われる日本人の心の豊かさの欠乏を自覚させられると共に、21世紀の担い手である子供たちが健やかに育つことへの願いは、言葉や政治の壁を越え世界共通であることを再認識しました。ヘルシンキやパリでも女性の地位向上の先進国としてまた個人を大切にする老人福祉に関わって活躍する多くの女性達に学ぶことの大きい研修でした。

はるかな北の大地ロシア連邦、私達は未知へのときめきと緊張感で一杯でした。モスクワに着いた私達の眼前に広がった光景は、ホテル近辺や地下道に群る老若の男性達、人形を抱いて物乞いするジプシー、町をぶらつくアルコール中毒の男性など行く人達の表情はインフレに悩むロシアの苦悩でした。

反面、クレムリンの城壁と赤レンガ造りの国立歴史博物館・ Gum百貨店・色鮮やかなツシリー寺院に囲まれた赤の広場(アカ……ロシア古語・美しいを意味する)やクレムリン宮殿では、その美しさ雄大さに感嘆しました。レーニン廟の衛兵の交代も私達の帰国直後に廃止され、ロシア変革の一時期を見ることが出来た思いがします。レニングラード州サンクトペテルブルグへ向かう夜のモスクワ駅構内で、地方へ出稼ぎにゆく人々の雑踏を縫って乗り込んだシベリア鉄道の夜行列車「赤い矢号」は各室錠をかけた上、ロープで括りつける程の治安の悪さに緊張しましたが、夜が白むにつれて車窓の大草原に点在する民家の風景に感動し無事に到着しました。

サンクトペテルブルグは静かな落ち着いた街並みでした。その歴史を秘めて滔々と流れるネヴァ河・エルミタージュ美術館や多くの宮殿・寺院はロシア帝国の首都として政治文化産業の中心であったことの証であり、京都に似通う親しさを感じました。州庁での公式行事を通して、ベリヤコフ知事の素朴でおおらかな人柄、母親の様なシドロヴァ副知事(7名の副知事の内ただ一人の女性)州庁のスタッフの温かい心配りを受け、数多い福祉、教育施設の研修と友好親善を重ねました。

そこで出合った婦人同盟の代表者達からは、社会体制の変化により働く場を失い生活不安に陥った女性を社会的に守るために組織を結成し、女性を守る立法の権利を獲得したこと、家族や子供のために「くらし」の安定を図ることを第一課題とし、自分達で企業を企し、マスコミを通じて主婦達を励まし活動する辛抱強い大きな心にパワーを感じました。一方彼女達はロシア帝国のプライドをもち絢爛なファッションの流れを失うことなく質素な中に、おしゃれと気品を備える女性達でした。

和服姿の服部団員は着物文化を通して本当に大きな交流の花であったことは言うまでもありません。州立病院へ贈った注射器はマスコミを通して全国に紹介される程、非常に喜ばれましたが、改めて医療器具の不足を痛感しました。

郊外にあるガッチナ市は旧貴族の別荘地として発達し

▶心開かれた日本の実現を◀



日本国際連合協会京都本部常任理事・事務局長  
京都府「世界に広がる国際化社会」推進懇談会委員 大野 明

2, 3年前にみなさまの学習会に招かれ、国際情勢について講義したことがございます。いつも前向きに活躍されている京都府海外研修KYOのあけぼの会が今後大きく発展されますことを期待しています。

古くから旅人は新しい知識、情報をもたらしてきました。それは未知の土地の景色やそこに住む人々についておもしろく伝え、外界を知るのに役立つ話だったと思います。旅人の話に出てくる世界へ行ってみたい、住民に会ってみたいーそんな願望をきつと抱いたことでしょうか。これは旅行も制限されていた封建時代の話ですが、現在では

通信、交通技術が発達し、国内ばかりでなく、世界の国々へ旅するのも大変容易になりました。TVが伝える映像から得た知識も加わり、遠かった外国が身近になってきました。どこの国にも長い歴史の中で独特の文化が培われ、国民の思考も宗教も私たちとは同じでない。地球が狭くなったとはいえ、五十六億余の人類が相互に理解し合うことは並大抵ではないのです。

わが国が積極的に西欧科学文明を採り入れ、わが国を近代国家に築きあげたのはつい百年程前のことでした。それほど西欧社会に傾倒し、先進国に仲間入りしたにもかかわらず、このところ日本の閉鎖性を攻める声が強烈に響いています。産業、経済はもとより文化など社会全体が外に門戸を開ざしているという批難です。また日本人の「心の狭さ」も指摘されています。「島国だから」という人もいますが、同じ島国の英国人の行動はどうでしょうか。反省すべき問題の一つかもしれません。

わが国経済界では円高やバブル崩壊後の不況の影響で産業の空洞化とか消費者には利益ある価格破壊などが起きています。好むと好まざるにもかかわらず、わが国は開放政策を進めねばならなくなりました。世界の国々が足並みを揃えて貿易の自由化を促すためWTO(世界貿易機関)も発足します。

ご存知のようにわが国は経済大国のひとつです。いま世界にある百九十九カ国の三分の二は貧しい国であり、そのうえ紛争が各地で絶えない状況です。わが国にその紛争解決や平和維持のための協力が求められています。また貧困に苦しむ人々への海外援助も要請され、そのことはわが国の責務だとさえいわれているのです。ODA(政府開発援助)のわが国拠出額は百十億ドルとアメリカのそれを抜きました。

いま、わが国は国際化を推進しています。「日本文化のふる里」の京都も行政、大学、マスコミはじめ草の根グループに至るまで多方面で国際交流の事業が展開されています。

留学生など外国人と市民との交流も盛んになってきました。建都千二百年の記念事業もグローバルなスケールのものが数多く開かれました。

世界の情勢は刻々変化していきます。二十一世紀に入れば国際理解を深めることがさらに必要になると思えます。それにマルチメディアの出現で情報氾濫が起きると予測できます。

これから私たちが諸外国を訪問する機会を数多くつくり、その国の認識を深めると同時にわが国へのファンづくりに努めたいものです。もちろん外国からのお客さまも大歓迎です。「日本人の心が開かれた」「日本はもう鎖国でなくなった」と世界の人人から賞讃される日がいつ来るか待ち遠しいです。

特集

▶「違い」を認識することから◀



太田 緑  
(1985年研修参加)

海外旅行者の数が年間1179万人にのぼるといふ今日、「海外」は非常に身近なものになっています。テレビなどを通じ、実際にその場に行かなくても、様々な土地の様子を知り、文化を垣間見る事が出来ますし、世界中の食べ物・飲物もデパートに行けば手に入るようになりました。海外への団体旅行も、日程・目的地によっては、国内旅行よりも安価である事もあります。そうした中で、「海外」に於ける「研修旅行」はどのような意義を持つのでしょうか。

一般の海外旅行と研修を目的とした海外旅行の大きな相違点は、参加者の目的意識の違いである事は明白です。美術・博物館見学もよし、名勝見物もよし、美味しいものに舌鼓を打つもよし、買物もよし。研修旅行には、こうしたいわゆる海外旅行の楽しみほかに、新しい自分の発見という宿題が与えられます。

研修旅行の成否は出発前の準備の時点でかなり決まるといわれています。自分たちが何を求めてこの旅行を計画し、実行していこうとするのか。訪問国の政治・経済・社会事情や、日本との歴史的な繋がり、現在の関係。気候や食事・言葉の事など、出発前には心配はつきません。

でも、正直な話、行ってみないとピンとこないのですよね。自分の目で見て、足で歩いて、失敗もしたりして。その上でもう一度訪問国について興味を持って調べたり、読んだりすると、同じ案内書でも10倍おもしろいのはもう皆様も御経験の通りだと思います。

異文化に接して、何を感じ、何を考えるかは、個人の生活や経験によって違うと思います。個人差はあれ、全ては「違いを認識すること」から始まります。今まで自分が持っていた価値観が、大きく変化することもあるでしょう。研修旅行の持つ本当の価値はそうした変化をそのままに捨て置かず、自分を磨き続ける事にあるのではないのでしょうか。

世界にはいろいろな文化があり、いろいろな人間が居るのだという事、そしてそれはあるがままを認めるべきで「優劣」をつける事ではないのだという事を、私はこの9年間の海外生活の中で強く感じています。「違い」を認識した上で、それを尊重できるかどうか、今後の日本、そして日本人に与えられた課題のような気がします。